

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：32206

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20839

研究課題名（和文）高齢者の孤独感に対するコラージュの有効性の検証

研究課題名（英文）The effectiveness of collage work against a feeling of loneliness in elderly individuals

研究代表者

成澤 明 (Narusawa, Akira)

国際医療福祉大学・成田看護学部・講師

研究者番号：80710061

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、通所介護サービスを利用している高齢者の孤独感に対するコラージュの有効性を明らかにすることを目的とした。コラージュ制作前後で質問紙を用いた聞き取り調査（孤独感）、フェイス・スケール、生理学的指標を測定した。

調査対象者は、A県4施設の通所介護サービス利用者19名（男性：3名、女性16名）であった。コラージュ制作前後の比較において、孤独感尺度得点では有意差は認められず、フェイス・スケール（ $p=0.001$ ）で有意差が認められた。また、生理学的指標の血圧・脈拍・自律神経機能では有意差は認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

孤独感が高血圧、死亡率、うつ傾向といった健康に影響を与える要因であることが報告されている。孤独感などの心理的ストレスが不快なものとして評価されると情動が起り、自律神経系へ伝達される。それに対処するために生理学的反応を引き起こすことから、生理学的反応が多くの疾患あるいは回復障害の関連要因として重要視されている。そのため、生理学的反応が安定するような支援が重要である。

地域在住高齢者に対するコラージュの有効性を検討することで、様々なストレスによる生理学的反応が安定し、孤独感が影響すると考えられる健康問題の予防につながると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the effectiveness of collage work against a feeling of loneliness in elderly people using day care services. Subjects underwent an interview using a questionnaire (loneliness) and measurement of face scale and physiological indicators before and after collage work.

Participants in this study were 19 elderly individuals (3 men and 16 women) who use day care services at 4 facilities in Prefecture A. In the comparison before and after collage work, no significant difference was found in the loneliness scale, but a significant difference was found in the face scale ($p=0.001$). Among physiological indicators, no significant differences were found in blood pressure, pulse, and autonomic nervous function.

研究分野：高齢者看護

キーワード：孤独感 高齢者 通所介護 コラージュ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国では、死亡率低下に伴う平均寿命の延伸、少子化の進行に伴う若年人口の減少により、急速に高齢化が進行している。そして、高齢者は社会的に孤立しやすく、生きがいの低下、消費者被害、犯罪、孤立死(孤独死)に陥りやすいことから社会問題のひとつとされている。このことから、高齢者の社会的孤立は、政策的に取り組みなければならない重要課題とされ、各自治体で様々な取り組みが行われている。「社会的孤立」と併記される概念として「孤独感」があげられ、「社会的孤立」は客観的な概念、「孤独感」は主観的な概念として区別して考えられている。

近年の研究において、孤独感は、高血圧、死亡率、うつ傾向といった健康に影響を与える要因であることが報告されている。しかし、健康に影響を与える要因であるにも関わらず、孤独感を緩和するための研究蓄積は少ない現状にある。

孤独感などの心理的ストレスが不快なものとして評価されると情動が起こり、自律神経系へ伝達される。それに対処するために生理学的反応を引き起こすことから、多くの疾患あるいは回復障害の関連要因として重要視されている。そのため、生理学的反応が安定するような支援が重要である。

芸術療法のひとつであるコラージュは、雑誌や広告などから写真や絵といった素材を切り抜き、自由に台紙に貼ってひとつの作品を作り、極めて簡単な方法で自己の内面を自ら振り返るものである。コラージュ制作は、自己表現やカタルシス効果が認められており、コラージュ制作者の気分を好転させ、リラクゼーション効果が明らかにされている。また、外出が困難な高齢者であってもひとりで実施することが可能であり、場所を選ばず、自宅にあるもので実施できるという簡便性がある。カタルシス効果、気分の改善、リラクゼーション効果、ストレス軽減、自尊心の回復などの効果をより簡便な方法で得られることから、孤独感を緩和する支援方法として適していると考えられる。しかし、心理的効果や生理学的指標にどのような変化を及ぼすのか検討した研究は少ない。コラージュ制作の実施が心理的効果を及ぼし、孤独感が緩和されることによって、ストレスによる生理学的反応が安定し、孤独感を緩和する効果が期待できると考え、孤独感を緩和する支援方法のひとつとして、コラージュの効果について検討する。

2. 研究の目的

本研究では、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感に対するコラージュの有効性を明らかにすることを目的とした。具体的には下記の を目的とした。

通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感の程度によるコラージュ制作の特徴を明らかにする。

孤独感に対するコラージュ制作の有効性を孤独感尺度得点、生理学的指標(血圧・心拍・自律神経機能)、フェイス・スケールにより明らかにする。

3. 研究の方法

1) 研究対象者

研究対象者は、A県通所介護サービスを利用している地域在住高齢者とした。A通所介護サービス事業所の責任者に対して調査内容を説明文書と口頭で説明し、調査協力の同意を得られた事業所の通所介護サービス利用者の中から、選択基準を満たす者を施設担当者から紹介を受けた。紹介を受けた利用者に対して、説明文書と口頭で説明し、研究参加に協力意思のある高齢者を対象者として選定した。

選択基準は、障害高齢者の日常生活自立度判定基準ランク B、C を除く者、質問の内容を理解し、回答が可能である者、起立性低血圧の現病がなく、3分程度の立位保持が可能である者とした。回答可能についての判断は、改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)で21点以上とした。

2) 研究デザイン

本研究は介入研究とし、クロスオーバーデザインで実施した。研究対象者を2群(「介入先行群」・「介入後行群」)に分け、「介入先行群」はコラージュ制作を1か月に1回(計3回)実施し、「介入後行群」は今まで通りの通所介護サービスのプログラムを続けてもらうようにした。

「介入先行群」のコラージュ制作終了後に入れ替えを行い、「介入後行群」にも同様にコラージュ制作を実施した。

3) コラージュの制作方法

コラージュの制作は、制作時間を短縮すること、持ち運びが可能でどこでも実施可能であること、高齢者の切り抜くという動作の難しさを考慮し、高齢者に推奨されているコラージュ・ボックス法(素材をボックスに入れて準備し、台紙に自由に貼り付けてもらう方式)とした。

指定の画用紙を配布し、切り抜かれた紙片を箱の中から選び出し、台紙の上に自由にレイアウトしながら貼りつけるように教示し、コミュニケーションを取りながら実施した。コラージュ制作後は、全体の題(タイトル)をつけてもらい、内容の確認と作品の全体的な感想を聞いた(制作中にどのようなことを考えたか、何を表現したのかなど)。

実施回数は1か月に1回、計3回実施し、1グループ4名とした。基本的に制限時間は設けず、自由に制作してもらうようにした。なお、コラージュは、研究対象者1名で一作品を制作と

した。コラージュ制作で使用する素材は、写真の2L判(127 × 178mm)の大きさとし、できるだけ幅広い分野の200の素材を箱の中に入れ、使用する素材は、毎回同様の素材で実施するようにした。

4) 調査内容

高齢者の孤独感に対するコラージュの有効性を明らかにするために、基本属性の他、(1)孤独感の有無：改定版 UCLA 孤独感尺度(第3版)日本版、(2)フェイス・スケール(6段階)を調査した。また、(3)生理学的指標として、血圧・心拍・自律神経機能(活動の大きさ、パルス、反応力、切替力、回復力)を測定した。

5) データの収集方法

基本属性、孤独感の有無、フェイス・スケールは質問紙を用いた聞き取り調査を行い、生理学的指標(血圧・心拍・自律神経機能)は測定を行った。

通常プログラム期間(ベースライン)の前後、コラージュ制作前後に孤独感の聞き取り調査および、生理学的指標の測定を行い、コラージュ制作前後(コラージュ制作1~3回目)にフェイス・スケールの聞き取り調査および生理学的指標の測定を行った。

(1) 質問紙を用いた聞き取り調査

質問紙を用いた聞き取り調査は、1回30分程度とし、対象者の心身状態に合わせて面接時間の増減を調整した。また、対象者の希望および心身の状態に応じて、協力施設の個室や利用者が普段使用しているテーブルで実施した。

(2) 生理学的指標の測定

生理学的指標(血圧・心拍・自律神経機能)の測定は、株式会社クロスウェル「きりつ名人」を使用した。「血圧・心拍変動解析ソフト meijin」「電子非観血式血圧計サークルメイツ(TM-2584)」、株式会社アームエレクトロニクス「メモリー心拍計(LRR-03)」により、血圧・心拍の変化と自律神経機能(交感神経・副交感神経)の変化を測定した。「血圧・心拍変動解析ソフト meijin」は、血圧測定のために腕にカフをき、心拍数測定のために両手首にグリップを装着する血圧測定(オシロメトリック法)を座位・起立・立位の3姿勢で1分毎に5回行った。

測定時間は、通所介護サービスの提供時間内において、プログラムに影響がない時間の午後：14-16時で実施した。また、食事の影響を考慮し、食事摂取後1時間以上は空けるように配慮し、室温は空調で22-26に調節されていることを確認した上で、最低10分以上の安静後に測定した。

4. 研究成果

調査対象者は、A県4施設の通所介護サービスを利用している地域在住高齢者32名のうち、同意が得られ、全てのプログラムに参加できた19名(59.4%)であった(男性3名、女性16名)。年齢は83.11(SD±7.26)(61-91)歳、認知機能は、26.60(SD±3.18)(21-30)点であった。

全てのプログラムに参加できた高齢者の中で、生理学的指標(血圧・心拍)を測定できたのは17名(53.1%)であった。また、生理学的指標(自律神経機能)の測定において、データ安定度が80%以上であったのは9名(28.1%)であった。

1) 孤独感尺度得点によるコラージュの特徴について

コラージュ制作前の孤独感尺度得点の平均得点は32.26(SD±5.68)(23-44)点であった。孤独感低群は4名(21.1%)、孤独感中間群は14名(73.7%)、孤独感高群は1名(5.3%)であった。孤独感尺度得点の平均点より高い群を「孤独感高群」、低い群を「孤独感低群」とすると、「孤独感高群」は10名(52.6%)、「孤独感低群」は9名(47.4%)であった。また、コラージュ制作後の孤独感尺度得点の平均点は、34.42(SD±5.53)(21-44)点であった。孤独感低群は2名(10.5%)、孤独感中間群は16名(84.2%)、孤独感高群は1名(5.3%)であり、「孤独感高群」は8名(42.1%)、「孤独感低群」は11名(57.9%)であった。

初回のコラージュ制作において、切片数の平均は13.58(SD±6.15)(2-28)枚であった。素材の重ね貼りをしていただいたのは15名(78.9%)であり、素材が画用紙からはみ出して貼付していたのは8名(42.1%)であった。余白があったのは11名(57.9%)であり、余白の分量の平均は6.51(SD±17.79)(0-79.0)%であった。貼付内容は、自然・風景が18名(94.7%)、3.68(±2.58)(0-9)枚、人物13名(68.4%)、2.21(±2.97)(0-13)枚、植物12名(63.2%)、1.89(±1.82)(0-5)枚が多かった。

孤独感尺度得点の平均点で「孤独感高群」と「孤独感低群」の2群に分け、コラージュ制作の特徴を比較したところ、²検定の結果、孤独感得点の高低と切片数・重ね貼り・はみ出し・切り出し・斜め貼り・余白・中心性、空間配置では有意差は認められなかった。また、貼付内容(素材)による有意差は認められなかった。

2) コラージュの有効性について

コラージュ制作前後で平均値を比較したところ、t検定の結果、孤独感尺度得点に有意差は認

められなかった。また、フェイス・スケールでは、コラージュ制作 1~3 回目全てで有意差が認められ、気持ちの変化がみられた ($p=0.001$)。

生理学的指標において、血圧・心拍では安静・起立・立位・着席いずれにおいても有意差は認められなかった。自律神経機能は、データ安定度が 80%以上である 9 名を対象として分析したところ、活動の大きさ、バランス、反応力、切替力、回復力において有意差は認められなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 成澤明
2. 発表標題 通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感が生理学的指標に及ぼす影響
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----